

対人支援点描 (23)

「～新型コロナウイルス問題が HIV 検査に与えた影響」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

はじめに.

筆者は、2016 年より社会福祉法人はばたき福祉事業団北海道支部に所属して HIV/AIDS 派遣カウンセラーをしている。2020 年度から必要を求められ派遣カウンセラーと北海道の事務局との間でも調整役をすることになった。その打ち合わせの席で新型コロナウイルスの問題が HIV 検査にも影響が出ている問題が話題となった。具体的な実数を示すには、新型コロナウイルスの問題の収束が見えないなか提示することができないが、現状についての雑感を述べたい。

1. 新型コロナウイルスと保健所に課せられた緊急対応

2020 年 4 月 7 日に政府により 7 都道府県に緊急事態宣言が出され、4 月 16 日には対象が全国に拡大した。この過程で問題になったことの一つに PCR 検査の実施が挙げられる。PCR 検査とは、ポリメラーゼ連鎖反応(polymerase chain reaction)検査の略である。PCR 検査自体は新型コロナウイルスのためばかりではなく、感染症の分野で細菌やウイル

スの感染の有無を調べるために用いられている。当然、HIV の罹患がないかの検査にも用いられる。PCR 検査は、ウイルス感染の標準的診断方法として普及している。この PCR 検査を受けるための実施主体になったのが全国の保健所であった。保健所は、急遽、新型コロナウイルスの罹患の有無を調べるための先頭に立たされたのである。

しかし、このような状況のなかで保健所は、殺到する問い合わせや実施対応に追われることとなる。あまり報道されていないが、新型コロナウイルスの治療のため、患者を受け入れる医療機関への偏見差別や心ない嫌がらせも起こっている。保健所が行政側の機関であるために非難や批判は遠慮なく向けられている。その点については、矢面に立つ保健所などの機関に対し、政府や都道府県・政令指定都市の首長は、おおいに配慮があってほしい。

さて、このような事態になり、新型コロナウイルスとともに私たちの社会において PCR 検査というものが日常の言葉として見聞きするようになったわけである。日

本の場合、PCR 検査は対象を絞って実施している。このことに対し、日本のマスメディアは、日本の政府が国民に全検査をしないことを、あたかも怠慢であるかのように報道し、コメンテーターも自身の見解が正しいかのように指摘している。だが、本当に PCR 検査が行われるシステムや、実施する体制などについて情報を得て話題とされているのか、はなはだ怪しい。むしろ、無責任に話題が繰り広げられている。

本来、PCR 検査を行い、即日に検査結果が確かめられるわけではない。即日判定について技術上の問題は克服されているのかもしれないが、検査したものを分析する先は限られていたりする。PCR 検査の精度が高いものであったとしても、十分にウイルスの数が足りていないと検査の感度に引っかからない場合も考えられる。そもそも大規模で検査する体制自体もない。

そのため、気になるから保健所に相談、気になるから保健所で検査を受けたい、と殺到されては、対応しきれないのは当然の事態であるといえる。ただし、社会一般でいえば、世の中の人々は、保健所の体制がどれくらいの規模で、PCR 検査を行うためだけに事業があるわけではないことは知らない。国が保健所を検査機関に指定したために、当然、検査が受けられるだろうと思い、保健所に殺到したわけである。その結果、検査を受けられなかった、検査を受けられなかったために手遅れになり死亡した、とマスメディアが騒ぎ立て、さらに実際の批判の窓口として保健所が受けることになっている。

2. 新型コロナウイルスの PCR 検査対応に押しやられた HIV 検査

このような保健所の状態のなかで、脇に押しやられたのが HIV 検査である。保健所は HIV の相談業務とウイルスの罹患を調べる検査の最前線の一つを担ってきたわけだが、4 月以降、HIV 検査は中断している。8 月に入り、少しずつ再開してきているのだが、今後の新型コロナウイルスによる状況の変化次第では再中止となる可能性もある。

中止された理由には、いくつかのことが挙げられる。(ただし、現時点で調査を行ったわけではないので、HIV に関しての知識からの推測も含む)

① 新型コロナウイルスへの警戒

HIV のキャリアの人やその予備軍として心配している人が、外出することで、免疫力の低下により新型コロナウイルスにかかるかもしれない、重症化するリスクに不安を感じる、というものである。

② 社会的なバッシングへの警戒

同性愛者の出会いや交流の場であるはってん場に行くことを抑制できず、新型コロナウイルスに罹患する可能性があるとわかっていて、そのような場所に行ってもバッシングをおそれて HIV 検査を受けに来ない、というものがある。はってん場は、類いに漏れず繁華街にあり、自身の性志向も含めておもてにしたい抵抗感を持っている。普段なら、HIV 罹患が心配であれば、検査を受けられる機関に相談・検査に行くのだが、もしも新型コロナウイルス罹患となったら、自分や自分の属性、行った場所、その他、いろいろなことで社会から批判を受け、マスメディアが取り上げる格好の材料とされてしまうこ

とを意識している。同様のことが、韓国で 5 月 12 日に発生したクラスター感染で、感染者が同性愛者であり、感染場所が同性愛者が集うナイトクラブ(たぶん、日本でいうはってん場)であったことが記憶に挙げられるだろう。

③保健所の保健師が新型コロナウイルス対応のため人員が割かれ、HIV 検査対応ができない

この問題は、たぶん全国的な規模で起こっていると推察される。新型コロナウイルスのために HIV 検査体制にどのような影響が生じたのか調査が必要であるが、現状では現場にさらに負担を負わせることになるためできていない。だが、北海道新聞の記者がはばたき福祉事業団北海道支部に取材をし、記者が道内の保健所に聞き取り取材をしたものがある。それによれば、保健所の HIV 検査の実施状況について道内保健所 30 カ所中、8 カ所が休止することになったという(北海道新聞、2020 年 6 月 26 日朝刊)。

北海道内 30 保健所の HIV 検査実施状況 (一部、筆者が改変)

北海道新聞(2020 年 6 月 26 日)

札幌市 平日検査は 9 月末まで、夜間検査は 6 月末まで、休日検査は 6 月末まで休止

江別市 6 月末まで休止

千歳市 9 月末まで休止

滝川市 8 月末まで休止

苫小牧市 6 月末まで休止

【通常通り】旭川市、小樽市、市立函館、渡島、江差、八雲、倶知安、岩内、岩見沢、深川、室蘭、浦河、静内、上川、名寄、富良野、留萌、稚内、北見、網走、紋別、帯

広、釧路、根室、中標津

このように、新型コロナウイルス対応のための PCR 検査が保健所で任されるようになって、HIV 検査に支障が生じているのである。

おわりに.

北海道では、年間 2500~3000 件ほどの HIV 検査を実施する。その内、札幌市では年間 1300 件ほどの検査を実施している。ところが、保健所の新型コロナウイルス対応の影響を受け、HIV 検査が行われずにきている。基幹病院である北海道大学付属病院 HIV 診療支援センターによれば、昨年度 40 人弱の新規患者がいたのだが、今年度はいないという状態になっている。これは、新規患者がいらないということではなく、危惧される当事者が検査を受けられず、医療に結びついていないという重大な問題が生じているといえる。この北海道と同じ問題が全国でも生じていると推察される。

HIV の治療は、早期発見・早期治療の開始が重要である。HIV 罹患からしばらくの間は潜伏期間もあり、治療に至るまでの時間的な猶予はあるが、発症のどの段階で治療に結びつくかは個別の問題である。場合によっては、新型コロナウイルスの騒動で発見が遅れ、治療が遅れてしまうこともあるわけである。

こうしたことから、新型コロナウイルスの問題は、新型コロナウイルスだけの問題ではなく、HIV 検査の実施に影響を与えている。そのため、HIV 支援にあたる支援者は、新型コロナウイルス問題後の対応を迫られている。その際、カウンセラーに

についても被検査者が負ったリスクを考慮しながら、配慮と対応が必要であろう。

<補記>

2020年6月21日、社会福祉法人はばたき福祉事業団の大平勝美前理事長が逝去されました。長年、薬害 AIDS 訴訟の先頭に立って取り組まれてきた大平前理事長のことをいづらかでも知ってほしいと願い、大平前理事長が逝去前の5月19日のインタビューを付しておきたい。

『感染症への差別・偏見をなくすためには過去の失敗の教訓を活かせ』

https://www.videonews.com/interviews/20200519_ohira/